

マイクロカプセルを吸っても大丈夫？（仮）

——柔軟剤・消臭剤に反応するわたしたちからあなたへ

【筆者】古庄弘枝

【刊行】2019年4月5日

【判型・頁数】四六判 ～192頁

【予価】1000円

【企画趣旨】

香害を訴える声がある。頭痛、咽頭痛、口内の痺れ、結膜炎、胃腸障害、皮膚炎と被害の症状は多岐にわたる。電磁波に過敏、うつ症状を併発、といった声もある。

他者には感じない微量な香りでも反応が起き苦痛を訴えることから、「化学物質過敏症」と診断を受ける人もいる。

香害と名付けられた症状や訴えは、2000年初頭からポツポツと聞かれるようになり、現在ではSNS上でも多くの人たちが、香害による症状を訴えている。いまのところ、行政による実態調査はなく、原因の究明も行われていないため、被害者は反応や症状について情報を交換しながら、日常生活を維持するために大きな努力を払っている。

また、この情報交換のなかで、被害者から「ニオイ、香り」に止まらず、スプレー式の消臭芳香剤でも、同様の反応がでることがある、という訴えが相次いでいる。

香料は嗅覚で感じ取り、嗅覚受容体を通じて記憶の回路によりニオイを選別していく。近年研究がある分野で、まだ全容は明らかでない。香料のボリュームが大きくなることで人体にはどのような影響があるのかについても未解明なことが多い。

近年の香料ブームによって、そのボリュームが大きくなる一方であることは臭気判定士などの証言からも明らかだが、一般にはその点も知らされることは少ない。

一方で、従来化学物質過敏症は、建材などにふくまれるホルムアルデヒドが起因となっていることが多かった。それらは、ある程度発症の背景が明らかであり社会的認知や法的規制も生まれた。しかし、この10年内外の「香料」をきっかけとした化学物質過敏症はその機序についてはまったく明らかにはなっていない。

被害は広がる一方で、厚労省や経産省の動きは鈍く実態調査もない。

リモネンなど一部合成香料は、大気汚染への影響なども指摘されているが、工場などでの規制は厳密でも、家庭や個人で使用する噴霧剤などは法的な基準や規制はない。

そんななかで、被害者の訴えを「精神的、心因性であり、取るに足りないもの」という受け止め方が医療の世界でも常識になっている。

しかし、もし、香料によって精神障害を起こす事態になっているのなら、それはそれで大きな問題である。また、嗅覚受容体と神経の問題を「精神的、心因性」とすることに違和感を覚える人は多いのではないか。

食品の安全基準に比して、1日にその数倍は体内に入る、しかも肺にダイレクトに入っていく空気の質が問われない現状に疑問の声もある。

症状は、直接ただちに命に関わるのではなく軽んじる声もあるが、この状態が長くつづけば国民病といわれる「花粉症」の二の舞との声もある。

花粉は季節によるものが発症原となるが、合成香料やその香料を商品化するための素材が発症原とすれば、これは花粉症を越える被害が予想される。

より多くの人に被害の実態を伝えること、混乱の中にあって問題をどのように整理できるかのヒントを提示すること、行政や企業が速やかに取り組むことをコンパクトにまとめた緊急出版を目指したい。

【構成案】

はじめに

香料か？ マイクロカプセルか？

——実態調査もないなかで

近年の化学物質過敏症は香害が増えたこと。

その被害の声から、香りそのものが過去になく大量に商品化し、ボリュームも高くなる一方なこと。

長持ちに使われているマイクロカプセルは、消臭噴霧剤にも応用されていること。

いずれも、実態、背景、原因は不明なまま、被害の声がこどもにまで広がるつつあること。

I 章 ある日突然、自分の不調の原因に気がつく

——被害者の声

発症のきっかけ、症状、過敏症後体調で変化したこと、一番困っていること、

歯科医師

飲食店店主

パティシエ

子育て中

高齢期に

小学生

高校生

会社員
編集者
看護師

II章 においを感じるって？

——過敏なのか、鈍感なのか。いのちを守る器官の疲労

化学物質過敏症のこれまで。

香害のメカニズム

嗅覚だけが問題か？

III章 マイクロカプセル吸ってだいじょうぶ？

——消臭剤、柔軟剤のメカニズムと素材への疑問

なぜ、長期間「よい香り」がするのか？

「ニオイ」は消えるのか？

「マイクロカプセル」への疑念と実態

環境問題としての「公害」を懸念する研究者たち（研究報告）

おわりに

過敏という警告

——20年前に春先にマスクをしている人は奇異だった